

# 平成 26 年 度 事 業 報 告 書

平成26年4月1日から平成27年3月31日まで

認定NPO法人 IVY

## 1 事業の計画に関する事項

### (1) 特定非営利活動に係る事業

#### ① 世界の困窮した状況に対する迅速かつ適切な協力活動

事業名	事業内容	実施期間	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	事業額(千円)
カンボジア王国 スパイリエン州 農産物組合の持続的な経営体制の確立を通じた農村における貧困削減事業	<p>【内容】「スパイリエン州農産物組合(SAC)の持続的な経営体制の確立を通じた農村における貧困削減事業 フェーズII」日本NGO連携無償資金協力(通称「N連」)(2014年3月～1年間) スパイリエン州農産物組合(SAC)の持続的な経営体制の確立を通じ、貧困農民の生計向上を目指す三カ年事業。</p> <p>本事業によりフェーズ I で立ち上がった組合の新たな組織体制(マネジャーの雇用等)による、運営の安定化を図った。これまでの首都における顧客に加え日系大手スーパーからの注文にも応えることのできる生産・流通体制を立ち上げ、また特に有機野菜に関して値段設定を別に設け、大手スーパー向けに野菜を包装して卸すことになった。</p> <p>1) <u>組合リーダーの能力強化を行い、組織マネジメントを強化。</u></p> <p>2) <u>組合のオペレーションチームに事業管理を指導。</u></p> <p>3) <u>組合のサプライチェーンマネジメント(供給連鎖管理)を強化。</u></p> <p>4) <u>組合の生産体制を強化。</u></p> <p>【成果】</p> <p>1) マネジメントのガイドライン(内規)が作成され、ゾーンリーダーの稼働率が低く出荷が止まっていたゾーンで新しいゾーンリーダーが選出され、出荷が再開出来た。また SAC の運営委員が村でのワークショップをファシリテートするようになった。</p> <p>2) 雇用したマネジャーが二人続けて3ヶ月で辞任したため、マネジャーを中心としたオペレーションチームのスタートが遅れた。2015 年の SAC の年間計画を立てる際には、コンサル会社の分析をもとに野菜販売の粗利率と販売量を大幅に増やす計画を立てた。</p> <p>3) 日本から短期専門家を招きイオンへの出荷に備え、野菜の包装について指導を受けた。また、プノンペンへの野菜運搬のため冷房トラックを購入した。2012 年に無農薬野菜栽培の認定を受けていた既存の 71 名の農家が有機の</p>	4/1 ～ 3/3 1	カンボジア王国 スパイリエン州の 60 村及びプノンペン市	18人	スパイリエン州農産物組合のメンバー300名	28,001

	<p>認定を受けたのに続き、新たに 32 名の農家が認定を受けた。また、さらに今年度販売を開始予定の有機米の生産者 55 名が有機栽培の認定を受けた。</p> <p>4) 乾季対策として新規ため池、もしくは既存のため池拡大工事が 30 名のメンバーの農地で行われた。試験農場ではネットハウスや高設栽培棚で西洋レタスの栽培に成功した。</p> <p>【成果の一例】イオンの出荷は一時期209kg/月と低迷したが、3月は1,617kg(\$1,551)まで伸び、首都で二番目に大きな顧客となった。</p>					
カンボジア王国 スバイリエン州 算数教育プロジェクト (IVYyouthの活動)	<p>【内容】カンボジアでは教科書が貸与であり副教材もないことから、小学生の学力向上を目的として、算数ドリルを配布する活動を2010年から続けている。活動も5年目となった2014年度は下記の事業を実施した。</p> <p>1) ドリルの改訂 2) ドリルの配布校の拡大 3) ドリル使用状況調査</p> <p>算数のドリル配布を継続するかどうかを検討するため、自分たちの作った算数ドリルが、学校の授業でどの程度使われているのかを、春の渡航時に調査することとなった。</p> <p>【成果】</p> <p>1) 山形県内の企業からの寄付金により、支援校を新たに 14 校追加することが出来た。 2) 1年生ドリルの改訂を行った。 3) 今回の春渡航では、今までになかなか確認出来ずにいたドリルの使用状況を「メンバーが直接見てくる」ことを目的の一つとした。前回の渡航で配布した学校 14 校のうち 13 校で教員への聞き取り、授業観察を行った。その結果、聞き取りをした 15 人の教員のうち 13 人がドリルを使用していることが判明、また6校で実際にドリルを使っている授業を観察することが出来た。</p> <p>【成果の一例】</p> <p>授業観察を行った日、当然のようにドリルを鞆から取り出し勉強する子どもたちの姿があり、また、メンバーに自分の勉強しているページを説明してくれる子供たち、使い込まれているドリルに出会えて感無量。これらは、プロジェクト継続の理由となるだけでなく、今後の活動の大きな励みとなった。</p>	4/1 ~ 3 /31	カンボジア スバイリエン州 スバイチュルン郡、 仙台市、 山形市	20人	1,160人	1,012
イラク国クルド人自治区アルビル県のキャンプ外に住むシリア難民児童及びイラク国内避難民児童を対象とした教育支援	<p>【内容】2011年3月シリアで始まった内戦は新たな武装勢力の台頭を生み、6月にはイラク第2の都市モスルにまで侵攻した他、シリアとイラクの北部を占領した。そのため、シリア難民はさらに急増し393万人、イラクでも260万人もの国内避難民が出て、IVYが事務所を置くクルド自治区にもシリア難民24万、イラク国内避難民80万を受け入れている。難民というと難民キャンプが浮かぶが、クルド自治区を中心アルビル県ではシリア難民の65%がキャンプ外に住んでおり、支援の手がほとんど届いていない。特に子どもたちの教育はほとんど手付かずで、支援団体の数も少なく、言葉や通学手段の問題で75%が学校に通えていないという状況だった。そのため、シリア難民及びイラク国内避難民の児童に対して下記の3つの事業を行った。</p> <p>1) 「シリア難民児童への教育支援 フェーズⅠ」</p>	4/1 ~ 3/3 1	イラク国クルド人自治区アルビル県	7人	1) 補習校 200人 2) 小学校 760人	フェーズⅠ: 11,040  フェーズⅡ: 5,209  フェーズⅢ: 2,702

	<p>4/1-1/1 …補習校開校(前年度より継続)</p> <p>2) <b>「シリア難民児童への教育支援 フェーズⅡ」</b> 12/9-2/1 …情操教育強化</p> <p>3) <b>「キャンプ外の難民児童への教育支援 フェーズⅢ」</b>2/2-3/31 (事業としては2016/2/29まで) (ジャパンプラットフォーム助成事業)</p> <p>【成果】</p> <p>1) クルド教育省の協力を得て、4月1日にガラナワ補習校を開校。200人に算数、理科、英語、クルド語の授業を行うとともに補習校までバスでの通学支援を行った。9月10日には難民専用の小学校を開校したところ、現在の生徒数は760人にまで上っている。</p> <p>2) 美術・音楽・体育について、専門の外部講師を派遣し、各担当教師の指導力の強化を図った。</p> <p>3) アルビル市周辺の1366世帯への40ℓの灯油配布、避難所200軒への湯沸しボイラーの設置、113世帯への毛布、899世帯への冬物衣料の配布、ヤジディ教徒798世帯への越冬物資配布(ストーブ・毛布・冬物衣料)を行った。</p> <p>4) 難民専用小学校への支援の継続及びイラクの避難民の子どもたちへの補習校開校の準備を行った。</p> <p>【成果の一例】クルド自治区アルビル県ではシリア難民児童7,000人のうち、1800人(26%)しか学校に通えていなかったが、IVYを含めシリア難民専用の小学校3校が開校したことにより、教育を受けることができる子どもが1990人増えた。</p>					
<p>クルド人自治区のイラク国内避難民への越冬支援</p>	<p>【内容】<b>「イラク国内避難民への越冬支援」</b>11/1-1/31 10月の段階において、13,000世帯、78,000人のイラク国内避難民がアルビル県で避難生活を送っていた。これらの避難民のうち、2,767世帯16,600人は2つの難民キャンプに入っていたが、イラクでも少数派宗教のキリスト教徒、ムスリムカーカイーエ等10,233世帯61,400人は、教会、学校、空き建造物等に宗派ごとに暮らしており、キャンプに比べ、キャンプ外の難民は越冬物資が圧倒的に不足している状態であった。そこで、キャンプ外の避難民へ越冬支援物資を配布することとし、支援対象地域は独自の調査で国際機関の支援からもれている地域を選定するなど、より脆弱で支援が届いていない人々に支援を行うように努めた。(ジャパンプラットフォーム助成事業)</p> <p>【成果】 アルビル市周辺の1366世帯への40ℓの灯油配布、避難所200軒への湯沸しボイラーの設置、113世帯への毛布、899世帯への冬物衣料の配布、ヤジディ教徒798世帯への越冬物資配布(ストーブ・毛布・冬物衣料)を行った。</p> <p>また、大使館からの要請に基づき、バハルカキャンプ599世帯、ハルシャムキャンプ300世帯ヘユニクロからの冬物衣料8000枚の配布も併せて行った。</p> <p>【成果の一例】秋に調査した時点では電気の供給量が少なかったこともあり電気ストーブの要望が多かったが、冬が到来すると停電が続き、石油ストーブと灯油の需要が高まった。しかし、灯油を配布する団体が少なく、灯油の配布に関しては特に感謝された。</p>	<p>11/1 ～ 1/31</p>	<p>イラク国クルド人自治区アルビル市とその近郊及びドホーク県</p>	<p>7人</p>	<p>3,176世帯</p>	<p>21,744</p>
<p>中東理解講座</p>	<p>IVYは2013年10月にイラクのクルド自治区で難民支</p>	<p>8/2 3/2</p>	<p>第1回/山</p>	<p>4人</p>	<p>57人</p>	<p>200</p>

	<p>援を始めたが、「中東情勢は複雑なので興味が湧かない」という声をよく聞く。そこで、長年に亘って現地で取材活動をされてきたジャーナリストの方々に講師に現地で得た生の情報を伝えて、中東や平和への興味関心を促進することを本事業の目的とした。</p> <p>第1回講座 8月2日(土)15:30~17:45 「今、シリアとイラクで何か起きているのか~中東地域情勢の意味に迫る」講師 久保田弘信さん(フォトジャーナリスト)</p> <p>第2回講座 3月26日(木)18:30~20:45 「最新取材映像で見るシリア、イラク北部はいま」講師 玉本英子さん(アジアプレス記者)</p> <p>1) 写真、動画、パワーポイント等を使用した。 2) 第1回では途中で会場とイラク北部のIVYクルド事務所の駐在員をスカイプでつなぎ、意見交換をした。第2回ではIVYがイラクで行っている難民児童への教育支援の説明も加えた。</p> <p>第1回参加者 12名 第2回参加者 45名</p> <p>【効果】第1回は広報が行き届かなかったため、参加者が12名と少なかったが、第2回は朝日新聞を始め、Airy や弊団体のメールマガジン、Facebook 等を通じて広報した結果、会社員、教員、学生、研究者、マスコミ等 45名の多様な方々に集まっていた。アンケートは45名中22名の方から回答があり、4段階評価で「非常に良かった」18名、「まあまあ良かった」4名と高い評価をいただいた。「現地取材に基づく臨場感あふれた良いお話だった」「玉本さんが実際に見たこと聞いたことをお聞きできた貴重な時間でした」「迫害を受けている人々の情報が得られてよかった」「普段のニュースでは知ることができない事実を知ることができ、さらに考えを深めるきっかけとなった」「戦争は遠い国のことではなく真剣に考える時が来ている。無関心ではなく自分事ととらえて今後も自分にできることを考えていきたい」等の声が寄せられ、事業の目的は達成できた。</p>	6	形市国際交流協会 会議室 第2回/山形市市民活動支援センター 高度情報会議室			
--	--	---	---	--	--	--

## ②国内外の災害救援活動

事業名	事業内容	実施期間	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	事業額(千円)
東日本大震災支援事業 (あいびい保育園の運営)	<p>「あいびい保育園」の運営を通じた福島からの避難者のための保育環境整備事業</p> <p>【内容】震災から1年後の2012年5月、福島第1原発の事故により山形県は全国で最も多くの避難者を受け入れていた。避難者の多くは健康被害を心配し避難して来た自主避難のお母さんと子どもたちで、家賃以外、政府からの支援がなく、経済的に困窮し始めていた。そこで、お母さんが働いて避難生活を安定したものにするために福島専用のフルタイムの保育園として「あいびい保育園」を山形市小白川町に2012年9月に開園した。定員は40人。開園は平日午前7時半から午後6時半。保育士は全員有資格者でうち3人は福島からの避難者、保育料は諸経費込で月1万円、給食やおやつもセシウムや添加物に配慮した結果、お母さんたちが子どもを預けて安心して働ける保育</p>	4/1 ~ 3/3 1	山形県山形市	15人	フルタイム 幼児33人 母親23人  一時預かり 登録数 幼児40人 母親32人	34,868

	<p>環境の整備がすすめられてきた。</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当年度は就労支援として7～9月の3か月間、土曜日保育を試験的に実施した。しかし、利用者数は2世帯3人と少なかったことから中止した。</li> <li>・2年半の就労支援の結果、元は専業主婦だったお母さんたちが、内職からパート、パートも週3日勤務から5日勤務、フルタイム、正社員と徐々にステップアップしていった。</li> <li>・年間40人以上の目標数に対し、60人の母親が仕事や就活に保育園を利用した。</li> <li>・出席日の8割以上出席した子どもたちの数は、12か月平均で85%と高かった。</li> <li>・年間を通じて、閉園後も安定して避難生活を送れるよう、お母さんの就労支援、認可保育園への転園支援等を行った結果、6人が認可保育園へ、7人が幼稚園へ、また卒業生5人のうち、4人が山形市内の小学校へ入学した。</li> </ul> <p>【成果の一例】</p> <p>「山形に来て制限がなくなって、外遊びができるようになったのがうれしかったです」(5才の男の子と4才の女の子の母親)</p> <p>「あいびい保育園がなければ私は仕事に就くことができなかった。苦しいときには励ましてもらい、この2年半、精神的に鍛えられた。」(5才の女の子の母親)</p>					
--	--	--	--	--	--	--

### ③日本に定住する外国人への支援活動

事業名	事業内容	実施期間	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	事業額(千円)
外国人生活相談事業	在住外国人とその家族に対し、電話やメールで外国人からの生活相談に母国語で対応した。相談件数43件(-10件)	4/1 ～3 /31	日本国内	2人	43人	37
通訳・翻訳サービス	病院、警察、個人からの依頼により対応した。通訳32件(-44件)派遣、翻訳22件(+2件)	4/1 ～3 /31	山形県内	10人	54人	52
外国人日本語スピーチコンテスト	在住外国人が来日以来、日々の暮らしで感じていることを日本語で発表した。発表者6人、来場者約30人。学生の発表が増え、コンテストも定着してきた。	10 /4	山形市男女共同参画センター	5人	36人	96
子ども中国語教室	留学生や大学生に関わってもらいながら、学習を継続。30回実施。延べ156名が受講。	4/1 ～3 /31	山形市東部公民館	4人	延べ156人	170
上山日本語教室運営	40回実施。マンツーマンで、学習者の要望に合わせた授業を実施出来た。	4/1 ～3 /31	上市市働く婦人の家	6人	延べ108人	115

### ④地球市民を育てる国際理解教育・環境教育

事業名	事業内容	実施期間	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	事業額(千円)

ファシリテーター養成事業	地球子どもキャンプに先立ち、リーダー養成のための講座を1回開催した	10/25・26	朝日少年自然の家	1人	22人	168
地球子どもキャンプ	【内容】8月と12月の2回実施。誰にとっても身近な存在である「食」をテーマとして取り上げた。食を巡る世界の状況を提示し、自分たちは持続可能な食生活を選択出来るのかを追求するプログラムとなった。(12月:子どもゆめ基金、連合助成事業) 【成果の一例】(キャンプリーダー感想から)キャンプを通して、自分たちと食の関わりを見直すことに繋がった。キャンプが終わってもなお、リーダー同士で外食や買い物などすれば食について議論になる。これはキャンプに参加する大きな意義の一つだと思う。子供だけでなく、大人も一緒に身近なものから世界を見られるようになる。今回キャンプに参加した子供たちも給食や家庭の食事を通して、世界の人々や自然環境を覗き見てくれていることを願っている。	① 8/23 ② 12/26-28	①仙台国際センター ②朝日少年自然の家	①指導者21人 ②指導者30人	小学生43人	1,194
国際理解教育普及事業	【内容】最近、世界に若者の関心が低下している声を聞く。そんな中で、IVYは地球上で起きている出来事に対して、自分とどう関わっているのかという視点で見ることで、その上で問題の解決に向けて自分が出来ることを考察出来る人材の育成を目指し、教育現場へのファシリテーター派遣事業等を行ってきた。 1) 2013国際理解実践フォーラム 参加者数は年々増加し、今年の参加者は関係者を含め167名となった。IVYは全体の運営に関わったが、特に教員が主体の分科会では、内容の検討、人選等にも関わった。この分科会を通して県内、東北地域内の国際理解教育の実践者のネットワークが出来上がっていくことを期待している。またユースも分科会を持ちワークショップ「援助擦る前に考えよう」を担当した。 2) 国際理解教育へのファシリテーター派遣 【派遣先】仙台二華中、米沢第2中学校、川西中、蔵王一小、地球市民講座(仙台国際交流協会主催)、JICA教師海外研修事前事後研修、東北3県合同ワークショップなど ●IVYyouthの国際理解教育・環境教育活動 IVYの担当者と連携し、夏、冬のキャンプの企画運営、学校でのワークショップを行った。	4/1～3/31	【派遣先】	12人	約600人	546

⑥関連団体及び関係する県内、国際機関との情報交換、連絡調整及び協力、並びにこの法人の目的にかなう事業を行っている他団体に対しての助成援助

事業名	事業内容	実施期間	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	事業額(千円)
外務省NGO相談員相事業	東北6県を担当し、国際協力、国際理解教育等について寄せられる問い合わせに対応した。また仙台、東京での国際イベントにも出張した。相談件数 999件(前年比+229件)、出張サービス3件(+2件)	4/1～3/31	東北6県、東京等	3人	999人	2,887
IVY みやぎ事	2012年9月から人材獲得やファンドレイジングを目	4/1	仙台市	4人	417人	419

業	<p>的に、宮城県仙台市に支部「IVY みやぎ」を設置。本部と連携しながら独自事業を行っている。IVY は近年、会員数の伸び悩み、次世代活動者の不足、全体予算に占める自己財源の小ささなど、組織面の課題を抱えている。東北最大の都市・仙台で活動することで、多様なアクター（企業、大学、他分野の市民団体）と繋がり、これらの課題解決の道筋を探る。</p> <p>1) 講座等の開催による支援者の拡大 東北最大の都市・仙台で支援者を拡大することを目的に、報告会やシンポジウム等を開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● IVY Social School Volume 5 シリア難民支援活動 報告会 「シリア難民の子どもたちを学校へ」 仙台市青葉区のエル・ソーラ仙台で開催。参加者 25 名。IVY のシリア難民支援活動についてイラク駐在スタッフ(西村)が報告をした。この事業は東北 5 県を巡回するツアーの一環として行われ、IVY みやぎではツアー全体の広報物作成等も担当した。</li> <li>● 仙台地球フェスタへの参加 仙台市青葉区の仙台国際センターで開催された「せんだい地球フェスタ」に IVY として出展。シリア難民支援事業、IVYyouth のカンボジア事業等を紹介した。主催者発表で約 4,300 人が来場した。(IVY のブース、講演会等に参加した人数 370 名)</li> <li>● NGO×企業連携シンポジウム「東北“タッグ”で国際協力を新風を吹き込む！」 仙台市青葉区の仙台市民活動支援センターで開催。参加者 22 名。東北、仙台における国際協力 NGO と企業の連携促進を目的とした。セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの企業連携担当者の講演や、地元仙台の NGO や企業の事例紹介を行った。</li> </ul>	～ 3/3 1				
---	---	---------------	--	--	--	--

以上